第３章　精華町の歴史文化の特徴

第１節　精華町の歴史文化をとらえる５つの特徴

第１章で取り上げた精華町の自然的・地理的環境、社会的状況及び歴史的背景、第２章で示した精華町の宝ものの概要を踏まえると、精華町の歴史文化は、以下の５つの特徴でとらえることができます（図3-1）。

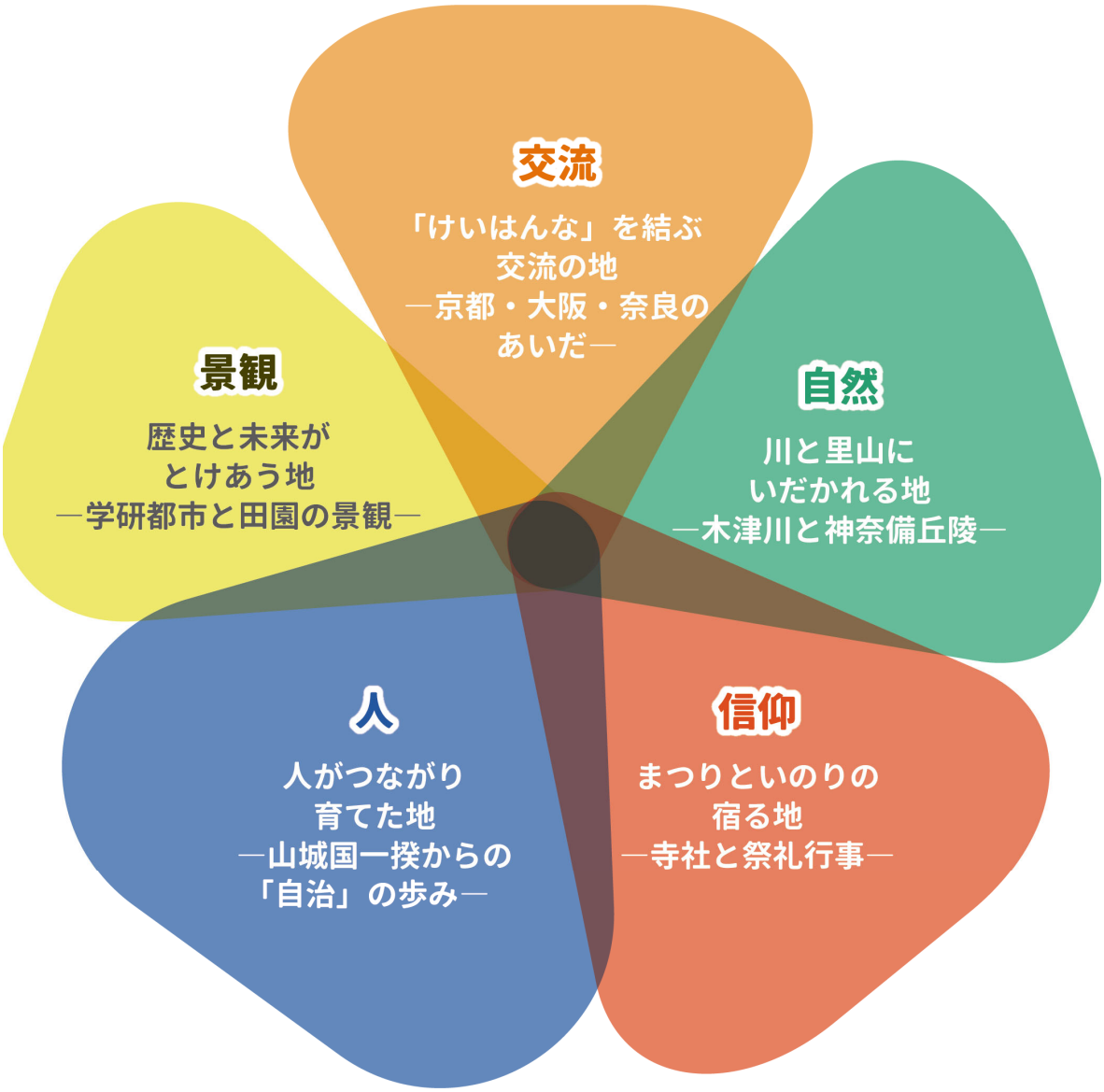


図 3-1　５つの歴史文化の特徴

これらの５つの特徴は互いに関わり合って成り立っています。例えば、自然は人びとの交流や信仰を生み出す基盤となり、人びとの交流により新たな信仰が生まれ、こうした営みの結果を現代の景観としてみることができます。

特徴１
交流

「けいはんな」を結ぶ交流の地　―京都・大阪・奈良のあいだ―

精華町は奈良（平城京）と京都（平安京）という２つの都のあいだに位置するとともに、大阪にも程近い場所にあり、古来、京阪奈（けいはんな）の３つの都市と交流を深め、大きな影響を受けながら、地域の歴史文化を育んできました。また、京阪奈だけではなく国内外のさまざまな地域とも活発な交流を図り、最新の技術や情報を取り入れ、国際的なつながりを築いてきました。

特徴２
自然

川と里山にいだかれる地　―木津川（きづがわ）と神奈備丘陵（かんなび）―

精華町の東部を流れる木津川は、町域と京都・大阪を結ぶ水上交通路として、古くから人の交流と産物の流通を支えてきました。相楽郡の「穀倉地帯」と呼ばれたように、木津川や支流周辺の平野部には水田が広がり、稲作がさかんに行われるとともに、近郊都市向けの青果の生産が行われてきました。町の西部や南部に広がるなだらかな丘陵地は、古代には古墳や集落が築かれ、近世・近代には薪炭や白土が採取され、身近な里山として地域の人びとの暮らしに密着してきました。

特徴３
信仰

まつりといのりの宿る地　―寺社と祭礼行事―

町内の神社や寺院では、先人たちの神仏に対する深い祈りや願いの込められた文化財が大切に守り伝えられてきました。寺社は地域の文化・交流の拠点という役割も担ってきました。神社では、建造物と「鎮守（ちんじゅ）の杜（もり）」が融合した良好な環境が維持されてきました。寺院では、個性豊かな古仏の数々が受け継がれてきました。人びとは豊作・除災・鎮魂を祈るため、四季折々の特色ある伝統行事や祭りを継承してきました。

特徴４
人

人がつながり育てた地　―山城国一揆（やましろのくにいっき）からの「自治」の歩み―

精華町内では、中世の惣村（そうそん）、現在の大字（おおあざ）の源流といえる近世の村、近代の行政単位としての村と、時代に応じた自治組織が地域の運営を担ってきました。中世には惣村が発展したほか、山城国一揆の舞台となりました。町内には近世・近代の村が担った多様な活動を今に伝える膨大な古文書が残ります。近代には複数の村々が共同で高等小学校や中学校を設立・運営し、その村々が合併して現在の精華町が誕生しました。

特徴５
景観

歴史と未来がとけあう地　―学研都市（がっけんとし）と田園の景観―

古くから精華町には、緑豊かな農村の田園風景が広がってきました。学研都市が誕生し、多くの研究施設や住宅地が建設されましたが、周囲の自然や環境と調和を図りながら、新しいまちが発展してきました。精華町には、農村の伝統的な田園風景と学研都市の新しいまちなみという２つの景観が共存しています。

第２節　歴史文化の特徴と関連する精華町の宝もの

前節で示した５つの特徴を踏まえて、図 3-2 に示すように精華町の歴史文化の特徴を 10 の要素に整理しました。本節では、それぞれの歴史文化の特徴に関連する地域のさまざまな精華町の宝ものを織り込み、詳しく説明します。

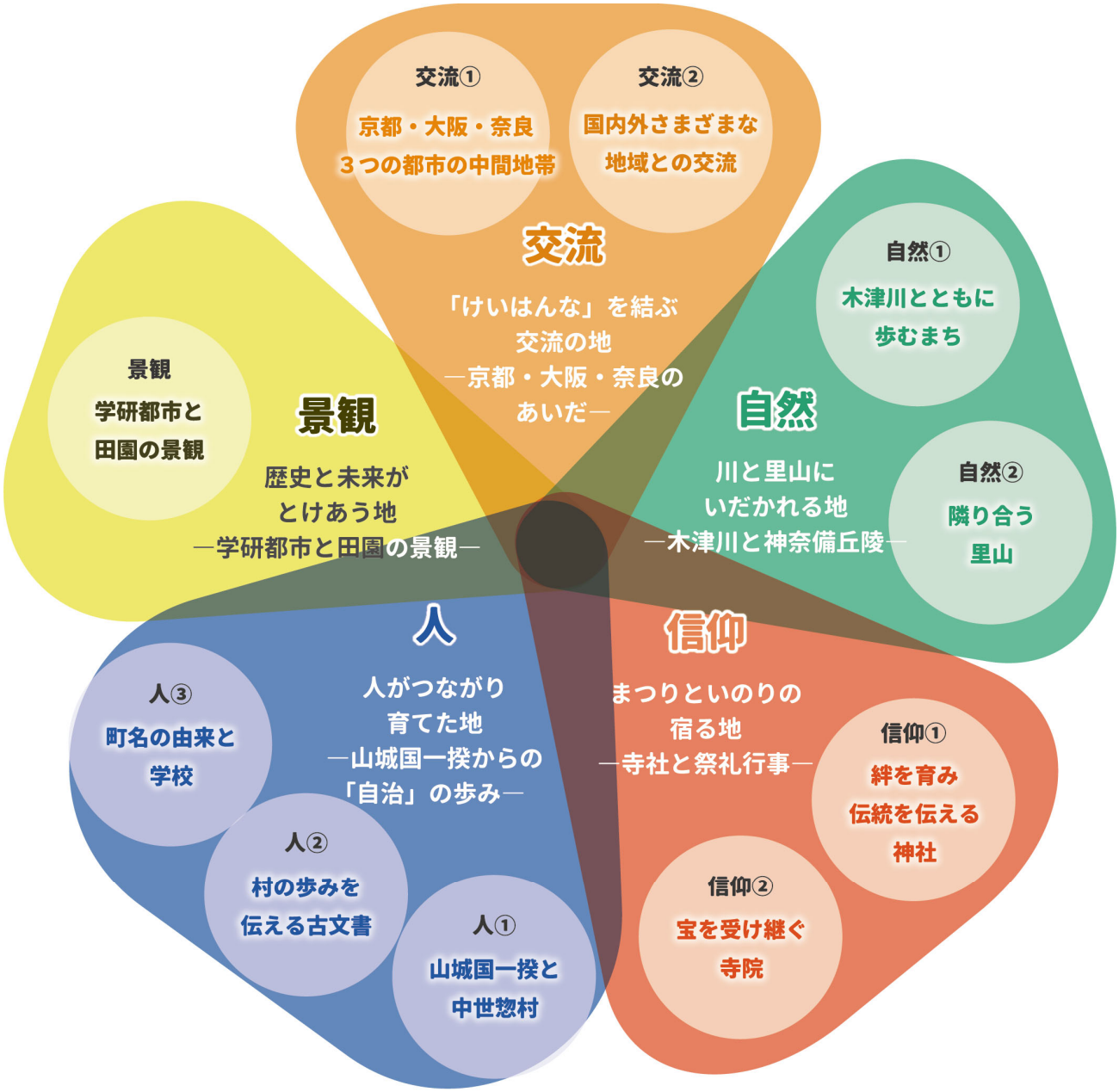


図 3-2　歴史文化の特徴と 10 の要素

交流①　京都・大阪・奈良　３つの都市の中間地帯

精華町は奈良（平城京）と京都（平安京）のあいだに位置し、大阪にも程近く、古来、３つの都市と交流を続け、大きな影響を受けながら、地域の歴史文化を育んできました。３つの都市との交流では、とりわけ道路・鉄道といった交通網が大きな役割を果たしました。

■貴族が行き交う古代の道

古代には、平城京と諸国を結ぶ官道のうち山陰道と山陽道が町域を南北に縦断していました。山田川沿いには難波津（大阪）や伊賀・伊勢へ向かう東西の道が横断していました。平安京に遷都したのちは、大和の春日社や長谷寺へ参詣に赴く天皇や貴族がこの地を通行しました。また、平安時代の京都や奈良における最新の作風を取り入れた仏像の数々が、町内の各寺院に伝えられています。

乾谷瓦窯跡（乾谷）・得所瓦窯跡（柘榴）

平城京の造営に際し、平城山丘陵に接する乾谷・柘榴では瓦を製造し、都の建設を支えました。

樋ノ口遺跡（山田）

難波津（大阪）や伊賀・伊勢へ向かう東西の道沿いにある奈良時代の遺跡で、彩釉陶器が多数出土したことで注目を集めました。

柞の杜（祝園）

京都と奈良を結ぶ交通の要所に位置した紅葉の名所です。歌枕として多くの和歌に詠まれ、『更級日記』にも登場します。小字名が残る祝園神社付近に比定されます。

平安時代の仏像（各寺院）

■奈良の影響を受けた中世の寺社

中世には、祝園荘・菅井荘等、興福寺・春日社関係の荘園が置かれ、奈良との深い結びつきがみられました。今も町内には春日神社を祀る地区（菱田・滝ノ鼻・舟）が多くあります。

春日神社本殿（菱田宮川原） 国重文

奈良の春日若宮の社殿を拝領したとの伝承があります。

新殿神社本殿（山田） 府指定

構造は流造でありながら、春日大社本殿の構造（春日造）から強い影響を受けています。

■人びとでにぎわう近世の街道

近世には、郡山街道が町域を縦断し、大和郡山・奈良と京都・淀・八幡を結ぶ道路として人びとが行き交いました。大坂方面へは大坂街道や四條畷街道が利用されました。また、町域には、禁裏御料（皇室領）・仙洞御料（上皇領）・公家領等、京都の朝廷関係の所領が複数設定されました。

郡山街道

大和郡山から八幡・淀を経て京都に向かう街道です。祝園神社西側に道標が立っています。

大坂（伊賀）街道

大坂と伊賀・伊勢を結ぶ東西の街道です。山田に道標が立っています。

四條畷街道

菅井から東畑を経て河内の四條畷方面へ抜ける街道です。東畑には昭和５年（1930）に道路拡幅工事を記念して建てられた修路碑があります。

■鉄道・道路網が発達した京阪奈の結節点

近代には、京都・大阪・奈良を結ぶ鉄道（現在の JR 学研都市線と近鉄京都線）が開通した影響を受け、都市近郊農業が盛んとなり、都市の食生活を支えました。戦後の高度成長期以降は、京都・大阪・奈良の通勤圏として住宅開発や都市化が進むとともに、昭和 50 年代後半以降、学研都市が建設され、京阪奈の結節点として最先端の研究施設や企業の進出が相次いでいます。

エンドウ・トウガラシ・スイカ・イチゴ
町内では、都市向けの蔬菜・果物が生産されてきました。

JR 学研都市線と近鉄京都線

国立国会図書館関西館

学研都市の研究施設

図 3-3　交流①に関連する主な精華町の宝ものの位置

交流②　国内外さまざまな地域との交流

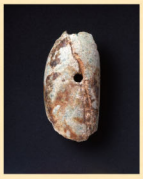
この地域は京都・大阪・奈良にとどまらず、日本列島内外のさまざまな地域と活発な交流を図り、最新の技術や情報を取り入れてきました。

■列島内外との先史・古代の交流

古代の遺跡では、北陸・東海・近畿の各地からもたらされた遺物や影響を強く受けた遺構が見つかっています。また、朝鮮半島からの渡来人に関する遺跡も残されています。町内には、下狛や北稲八間・南稲八妻のように古代の列島内外との交流を示す地名が今も伝わります。

椋ノ木遺跡（下狛）

縄文時代の翡翠の大珠は、北陸の糸魚川（新潟県）原産です。



畑ノ前遺跡（精華台・植田）

弥生時代の遺跡から、近江・伊勢湾系の弥生土器や、近江高島産の石庖丁用の石材が出土しました。

下狛

上狛（木津川市）とともに、古代、朝鮮半島からの渡来人の居住地であったことに基づく地名です。上狛では高麗寺跡が、下狛では里廃寺が確認されており、渡来系氏族がいち早く仏教文化を南山城の地に伝えたことを示しています。

畑ノ前東古墳群（植田）

古代の美濃国（岐阜県）味蜂間郡にあたる地域で集中的に築かれた横穴式石室と同様の石室が発見されており、北稲八間・南稲八妻という地名の由来となった古代氏族「稲蜂間氏」との共通性が、葬制・地名の両面で確認されます。

森垣外遺跡（南稲八妻）

朝鮮半島の影響が強い大壁住居や陶質土器が発見されており、この地域と渡来人の関わりが分かります。

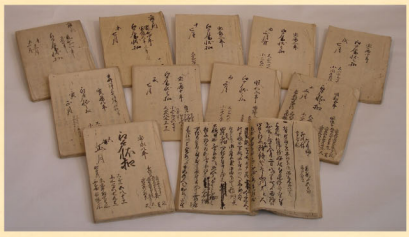
京都府埋蔵文化財調査研究センター提供

■文書を通じた情報交換

近世の町域には旗本の所領が多く設定され、旗本が居住する江戸とのあいだで旗本の家臣と所領の代官・村役人らが頻繁に文書を交換し、あるいは直接往来を重ねて、最新の情報がもたらされました。

森島清右衛門家文書　府暫定登録

江戸時代、江戸の詳細な情報が領主の旗本から文書や書状を通じて精華町域に届けられました。



会符

山田の在地代官福井氏が江戸等への公用旅行の際に用いた荷札です。

■国際交流と地域文化

現代では、学研都市に立地する諸施設に国内外から多様な人材が集い、最新技術の開発・研究のため、国籍や産官学の垣根を超え、活発な学術・文化の交流を展開し、国際的な心のつながりを築いています。このほか、正月の雑煮等、地域の食文化にも交流の影響を見て取れます。

正月の雑煮

町内では味噌仕立ての汁に丸餅という関西の代表的な雑煮が広く確認されますが、雑煮の餅をきな粉につけて食べる「大和の雑煮」の家もみられます。また、新興地区の雑煮は日本各地の故郷ゆかりの内容でバラエティーに富んでいます。

学研都市の研究施設

せいか祭り

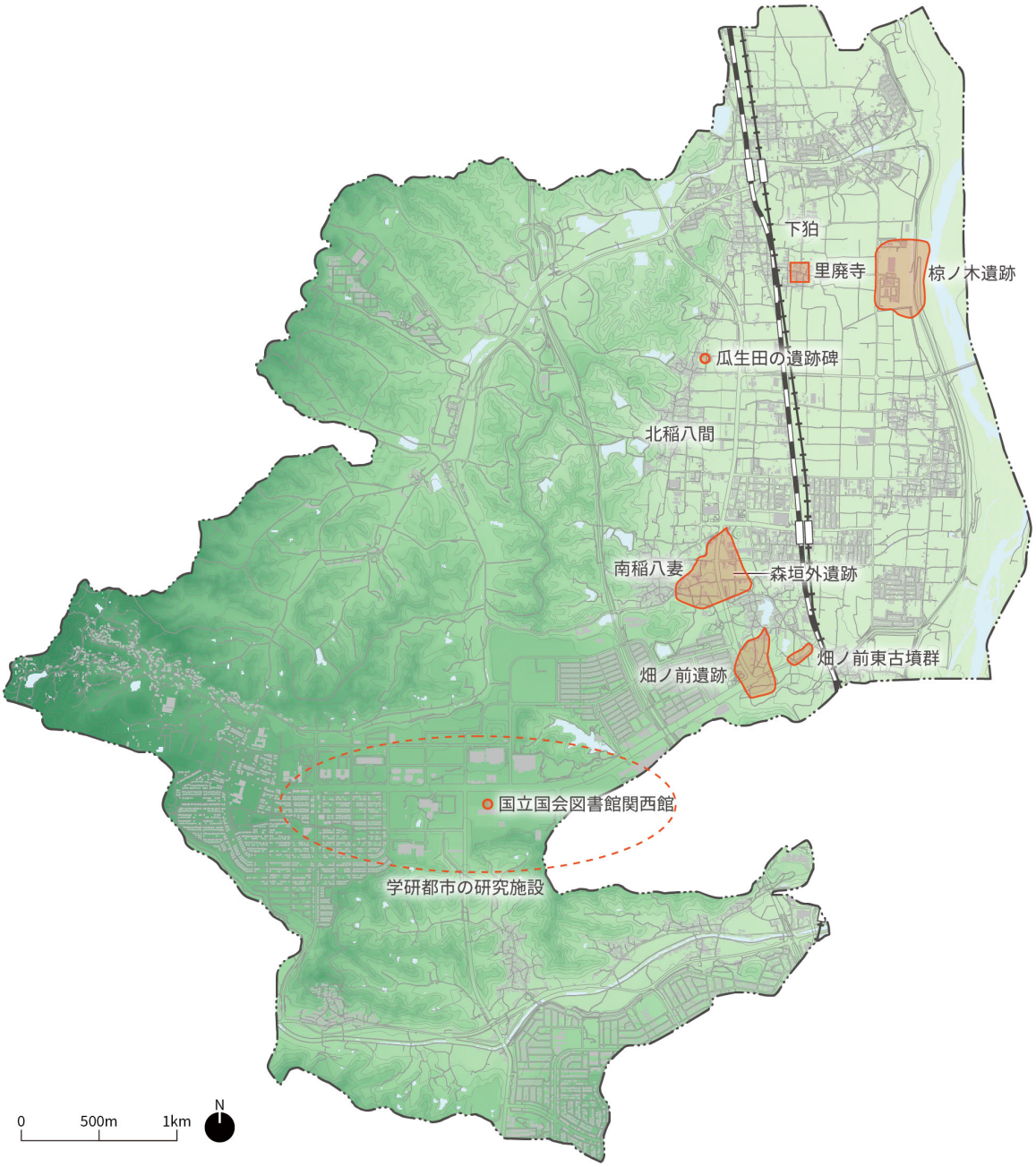


図 3-4　交流②に関連する主な精華町の宝ものの位置

自然①　木津川とともに歩むまち

町域では、木津川やその支流から水の恩恵を享受するとともに、水害を乗り越えながら、暮らしが営まれ続けてきました。

■地勢を活かした豊かな農業

精華町の東部には、木津川が運んだ土砂によって形成された沖積平野が広がっています。早くから水田が開発され、相楽郡の「穀倉地帯」と呼ばれるほど、稲作が盛んな地域となりました。町域の農業は、稲作を中心としつつ、副業として江戸時代には綿作、明治～昭和初期には茶業・養蚕も盛んに行われ、その後は近郊都市向けの青果生産にも力を注いできました。

条里制

木津川の平野部には古代の土地区画制度である条里制の遺構が顕著に認められ、菱田の「十ノ坪」など条里制に関係する小字地名もよく残されています。

民具

稲作をはじめとする農作業や暮らしのなかで使用されてきたさまざまな民具は、地域の生業や生活のありようや移り変わりを今に伝える民俗文化財です。

■用水の確保と水害との戦い

木津川や、その支流で西部の丘陵地に発する煤谷川・堀池川・山田川は、流域の田畑を潤す貴重な農業・生活用水として利用されてきました。一方でたびたび氾濫を起こし、住民に多大な被害を及ぼしてきました。また、農業用水を確保するため、川西用水や多数の溜池も作られました。

祝園の集団移転を示す地名

祝園村のうち南村の集落は、江戸時代に度々水害を受けたため、高い場所を求めて集団移転を行いました。移転前の場所には小字「古屋敷」、移転後の場所（小字榊ヶ坪）には通称「新屋敷」という地名が伝わります。

日出神社（柘榴）

柘榴という地名の由来伝承を持つ雨乞い石があり、かつては日照りの際にこの石を山田川まで運び降雨を祈願しました。

木津川　**煤谷川**　**堀池川**　**山田川**　**川西用水**

■交通路として利用された木津川

近代に鉄道が開通するまで、長らく木津川は精華町域と京都・大阪等の都市や南山城の周辺地域とを結び、人びとの交流や産物の流通を支える重要な役割を担ってきました。

江戸時代から昭和初期にかけて、木津川には帆掛け船が就航し、町域の産物を京都・大阪に出荷するとともに、都市や各地の産物を当地にもたらしました。町域では菅井浜に船問屋がありました。また、渡し舟（藪の渡し・開の渡し）が運航され、木津川の両岸を結びました。

菅井浜
かつては堀池川と木津川の合流地点周辺に、帆掛け船や渡し舟の船着き場があり、物資の揚げ下ろしをする問屋が営業していました。

舟（下狛）
下狛地区の一集落で、江戸時代には船頭村とも呼ばれました。木津川水運との関連を想起させる地名です。

椋ノ木遺跡（下狛）
木津川沿いに存在した縄文時代から中世に至る複合遺跡で、文献史料に登場しない大規模な中世集落跡が発見され、注目を集めました。

百久保地先遺跡（下狛）
木津川河川敷から中世の墓石群が多数発見され、現在は舟地区の郡山街道沿いに保存されています。

開の渡し跡・開橋（祝園）
祝園と平尾（木津川市）を結んでいた木津川の渡し。昭和26年（1951年）に木造の流れ橋ができ、昭和47年（1972年）には現在の鉄筋コンクリート製の橋に置き換わりました。

藪の渡し跡（菱田・下狛）
菱田・下狛（煤谷川河口付近）と綺田（木津川市）を結んでいた木津川の渡し。江戸時代のガイドブックである『拾遺都名所図会』に渡し場の光景が描かれています。

国際日本文化研究センター蔵

図 3-5　自然①に関連する主な精華町の宝ものの位置

自然②　隣り合う里山

精華町の西部や南部に広がるなだらかな丘陵地は、身近な里山として地域の人びとの暮らしの基盤となりました。

■丘陵に築かれた数々の古墳

菱田の薬師山、下狛の鞍岡山等、木津川沿いの平野を一望できる丘陵には、古代にこの地域を治めた首長の古墳が築かれました。丘陵の裾部では、古代の集落や居館の跡がみつかっています。

大福寺遺跡（下狛）

鞍岡山の山中で、縄文時代のサヌカイト製の石匙が見つかりました。

畑ノ前遺跡（精華台・植田）

弥生・古墳時代の集落跡や、奈良時代の大規模な居館跡が確認され、居館に付属する巨大な井戸枠が発見されました。

薬師山（菱田）

薬師山には、かつて平谷古墳群があり、山頂には大規模な円墳が築かれていました。近世には中腹に薬師寺があり、法華経を書写した多数の一字一石経が出土しました。

鞍岡山古墳群（下狛）

丘陵頂部の１号墳の裾からは埴輪棺、稜線部の２号墳からは鉄剣・青銅鏡、３号墳からは短甲・滑石石製品・家型埴輪などの豊かな副葬品が出土しました。

■里山での暮らしと生業

人びとは丘陵からもたらされる資源を利用して、生活や生業を営んできました。里山で採取された燃料（薪炭）や肥料（草木）は、日々の暮らしや農業生産を支えました。近世には煤谷山の利用をめぐって近郷間で大規模な入会相論が生じました。幕末期から昭和 30 年代にかけて、東畑の丘陵部では、磨き粉等の原料となる白土の採掘が行われ、各地に出荷されました。

白土（東畑）

東畑で採掘された白土は、荒さで分類されて販売され、米の精白やカルタの製造（糊に混ぜて台紙を分厚く丈夫にする）にも用いられました。手掘りの用具が京都府立山城郷土資料館に寄贈されています。今も現地には採掘坑の跡が残ります。

藤田茂三郎家文書　府暫定登録

近世に煤谷山の利用をめぐり近郷間で生じた相論の経過を示す文書や絵図が残されています。

煤谷山功労者碑（北稲八間）

北稲八間の阿弥陀寺には煤谷山相論の解決に奔走した功労者を讃える石碑が建てられています。

■陸軍祝園部隊と弾薬庫

太平洋戦争が始まった昭和 16 年（1941 年）には、煤谷川流域の広大な丘陵地に陸軍の弾薬庫（陸軍祝園部隊、現在の陸上自衛隊祝園弾薬支処）が建設されました。

川西側線・煤谷川鉄橋跡（下狛・菱田）

陸軍祝園部隊（弾薬庫）と片町線を結んだ軍用鉄道「川西側線」の煤谷川鉄橋の橋桁は、明治時代にイギリスから輸入した鋼材を用いて国内製造されたものを転用しており、戦争遺産であるとともに、近代産業遺産としても注目されます。

■緑につつまれた新しいまちと憩いの場

昭和 50 年代後半以降、南部・西部の丘陵部では大規模な造成・開発が進行し、桜が丘・光台・精華台等の新たなまちが建設されました。周辺で開発が進むなか、川・池や里山は、植物や動物等豊かな自然環境が残された場所であり、緑とふれ合い、暮らしに潤いと安らぎを与えてくれる憩いの場となっています。

丸山（南稲八妻）

南稲八妻の平野部に単独でそびえる自然の小丘で、近世には四宮神社が祀られていました。古墳と見間違うような形状は、地域のランドマークとして精華中学校の校歌に歌われるなど、住民から親しまれています。

嶽山（東畑）

町内の最高峰で、山上には役行者の石像がまつられています。

里山と周辺に残る自然（動物と植物）

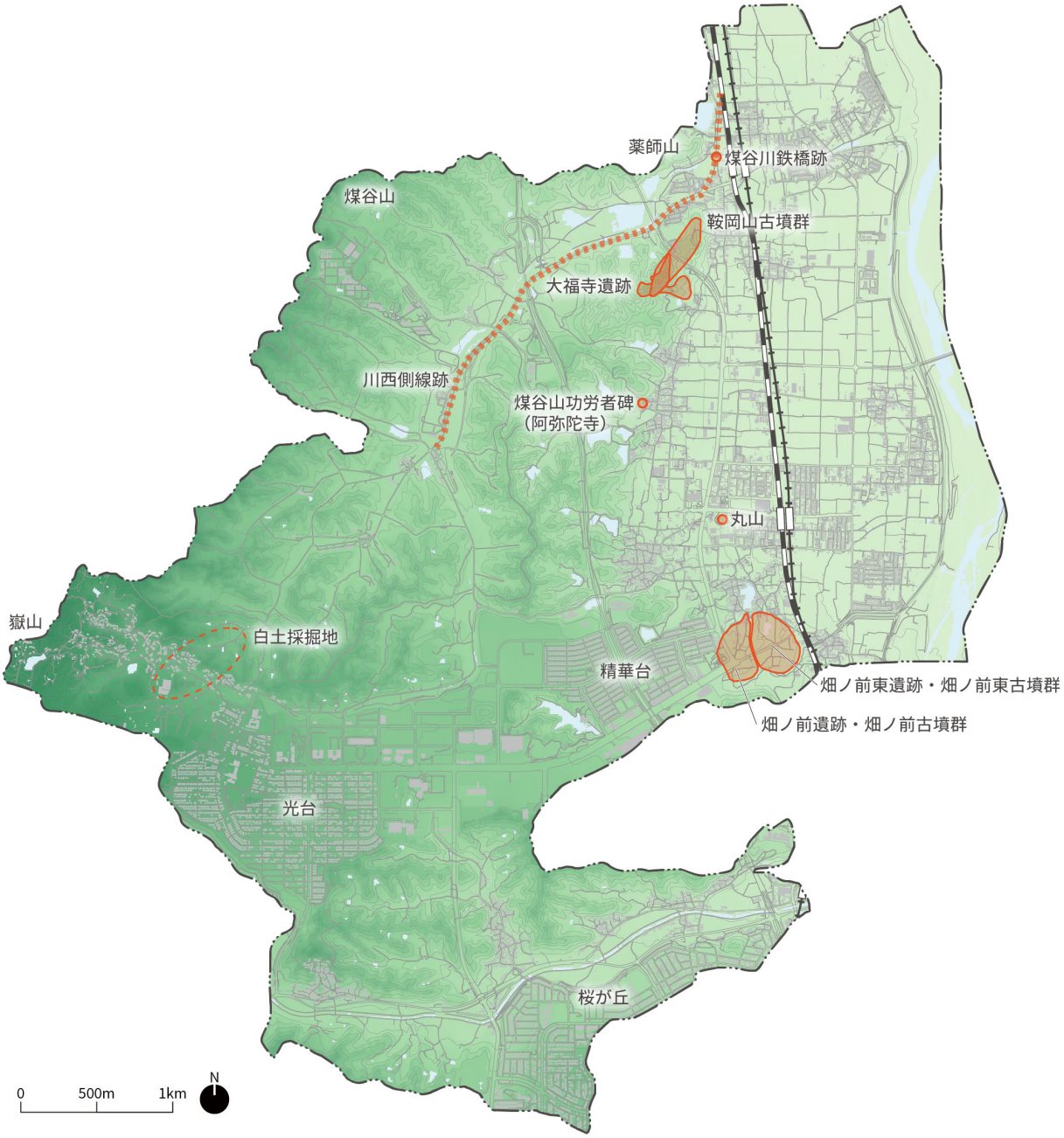


図 3-6　自然②に関連する主な精華町の宝ものの位置

信仰①　絆を育み伝統を伝える神社

町内の神社や寺院では、先人が神仏に捧げた深い祈りや願いの込められた様々な文化財が大切に守り伝えられてきました。特に神社は信仰の場であると同時に、地域の文化・交流の拠点でもあり、さらには貴重な文化財や境内の豊かな自然環境も守ってきました。また、各地区で神社を中心に四季折々の特色ある伝統行事が継承されてきました。

■神社の建築と鎮守の杜

町内の神社には、中世・近世に建築され、今日まで受け継がれてきた本殿が多く存在します。単体の建造物だけではなく、境内の諸建築の配置にも、南山城地域における神社建築の特色がよく表れています。神社の境内林、いわゆる「鎮守の杜」には豊かな自然環境が残されており、周辺で開発が急速に進むなか、地域住民や来訪者にとって貴重な憩いの場となっています。また、「鎮守の杜」の自然環境と、境内の様々な文化財（建造物・古墳・民俗芸能等）との調和が保たれています。

新殿神社（山田） 国重文 府指定

新殿神社は、山田・乾谷の氏神です。本殿（府指定）・末社八王子社（府指定）、および十三重塔（国重文）はいずれも室町時代に建造されました。本殿に隣接して薬師堂（旧医王寺）が建ち、神仏習合時代の様相を残しています。中央の舞台では翁舞が奉納されます。

鞍岡（くらおか）神社（下狛） 府暫定登録

鞍岡神社は、下狛のうち僧坊・里・谷の氏神です。本殿（府暫定登録）の手前に割拝殿・舞台・仮屋（氏子詰所）が建つ南山城の神社に特徴的な建造物の配置を示しています。境内は深い樹木に囲まれ、貴重な野生植物が自生し、様々な野鳥や昆虫も集まってきます。また、鞍岡山１号墳の墳丘が完存しています。

■地域の伝統を学ぶ年中行事

神社の年中行事は、宮座等の祭祀組織を中心として継承されてきました。各神社では、四季折々に伝統行事が執り行われており、特に年頭には特色ある祭りによって一年の豊作と除災を祈ります。こうした祭りのなかには地名の由来となった伝承を持つものもあります。また、子どもが重要な役割を果たしてきた祭りや行事も多く、地域の伝統を学ぶ場となってきました。

宮座

春日神社（菱田）・鞍岡神社・新殿神社・東谷神社等に宮座があります。春日神社や東谷神社の宮座には、近世以来書き継がれ、持ち回りで保存されてきた古文書が伝わります。

各地の秋祭

子供神輿が出る地区もあります。

祝園の居籠（いごもり）祭 府指定

崇神天皇と戦ったタケハニヤスヒコの軍勢がこの地で敗れ、祝園（古くは「ハフリソノ」と呼んだ）の地名が生まれたという、『古事記』・『日本書紀』の伝承に由来する祭りです。

春日神社の弓始式（菱田宮川原）

１月に行われる五穀豊穣を祈る神事で、恵方の的に向かって弓を射ます。

稲植神社の御田植祭（植田）

松枝を苗に見立てて田植えの所作を模擬し豊作を祈ります。

稲植神社の祇園祭（植田）

伝承によると、稲植神社は元祇園（京都八坂神社の元）といわれ、毎年７月に行われる祇園祭は「ぎおんさん」と呼ばれて大勢の参拝客でにぎわいます。

中区のおんごろどん（祝園）

節分の行事で、子どもたちが囃子唄に合わせてわらの槌で地面をたたきます。

東谷神社の四方参り（柘榴）

２月に村の四方を守る祠を巡拝します。

月見どろぼう

お月見の日には子どもたちが各家を訪れ、玄関に置かれたお菓子をもらっていきます。

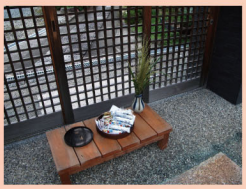


図 3-7　信仰①に関連する主な精華町の宝ものの位置

信仰②　宝を受け継ぐ寺院

現在、町内の寺院は浄土系の宗派（浄土宗・浄土宗西山禅林寺派・浄土真宗本願寺派・真宗大谷派・真宗興正派・西山浄土宗・融通念仏宗）が大半を占めています。これらの寺院の多くは、中世・近世に創建されたという寺伝を有し、江戸時代以降は地域の菩提寺・檀那寺として亡くなった村人を弔い、先祖を供養してきました。

■地域の宝を守り継ぐ蔵としての役割

町内の寺院は、地域の文化財を守り伝える「蔵」の役割も果たしており、古代・中世の貴重な仏教美術と、近世・近代に村人から寄進された様々な美術工芸品を、現在まで大切に受け継いできました。明治時代に神仏分離で廃止された宮寺等、過去に廃寺となった寺院に伝来した貴重な仏像・絵画・経典・什物を、残された寺院が宗派にかかわらず地域の宝として守り継いでいます。

常念寺　木造菩薩形立像（祝園）　国重文

蓮臺寺　木造薬師如来立像（南稲八妻）　町指定

いずれも平安初期に作られた町域最古級の仏像です。明治時代の神仏分離で廃寺となった寺院から現在の寺院に遷され守られてきました。

西国三十三所石仏（柘榴）

近世には西国三十三所観音巡礼が盛んとなり、柘榴には地元の信者によって石仏がまつられました。

若王寺　木造智証大師坐像（下狛）　国重文

天台宗寺門派（天台寺門宗）の祖とされる智証大師円珍の肖像です。現在は浄土宗西山禅林寺派に属する若王寺が護持しています。

極楽寺　梵鐘（柘榴）　府指定

鎌倉時代の作で、長らく山田の医王寺に安置されてきましたが、近代の神仏分離、戦争による金属供出などの困難を乗り越え、現在では柘榴の極楽寺に遷されています。

来迎寺（植田）

近松門左衛門作の人形浄瑠璃「心中宵庚申」の主人公お千代の菩提寺とされ、お千代と半兵衛の墓がまつられています。

■地域内外の交流の拠点

寺院では、寺子屋や村の会合、地蔵盆等の行事が開かれ、地域の文化や交流の拠点という役割も担ってきました。また、南山城三十三所、城南三十三所等の巡礼に組み込まれた寺院もあり、町域外からも参詣に訪れる人がいました。

地蔵盆

子どもたちが寄り集まる盆行事であり、多くの寺院・地区で継承されています。

講（観音講・庚申講・伊勢講・日待講・愛宕講）

かつては数戸が当番宅へ寄り集まって各地の寺社や神仏の掛軸をまつり飲食を共にする講が盛んに行われてきました。各講の掛軸や文書などが残されています。

南山城三十三所・城南三十三所

地域の観音霊場として南山城三十三所や城南三十三所が成立し、前者の札所寺院である禅福寺・観音寺・若王寺には巡礼額が掲げられています。

■精霊を迎えるおしょらいさん

村人の祖霊観や死生観をよく示す南山城特有の伝統行事としては、「おしょらいさん」とも呼ばれる盆行事が挙げられます。これは、盆の時期、辻や家の入口に花を飾った砂の壇を築き、線香を立てて、帰還する先祖の精霊を迎え入れるものです。

おしょらいさん

かつては盆に精霊を迎える砂盛りを作る際、子どもたちが中心的な役割を担うことが多く見られました。

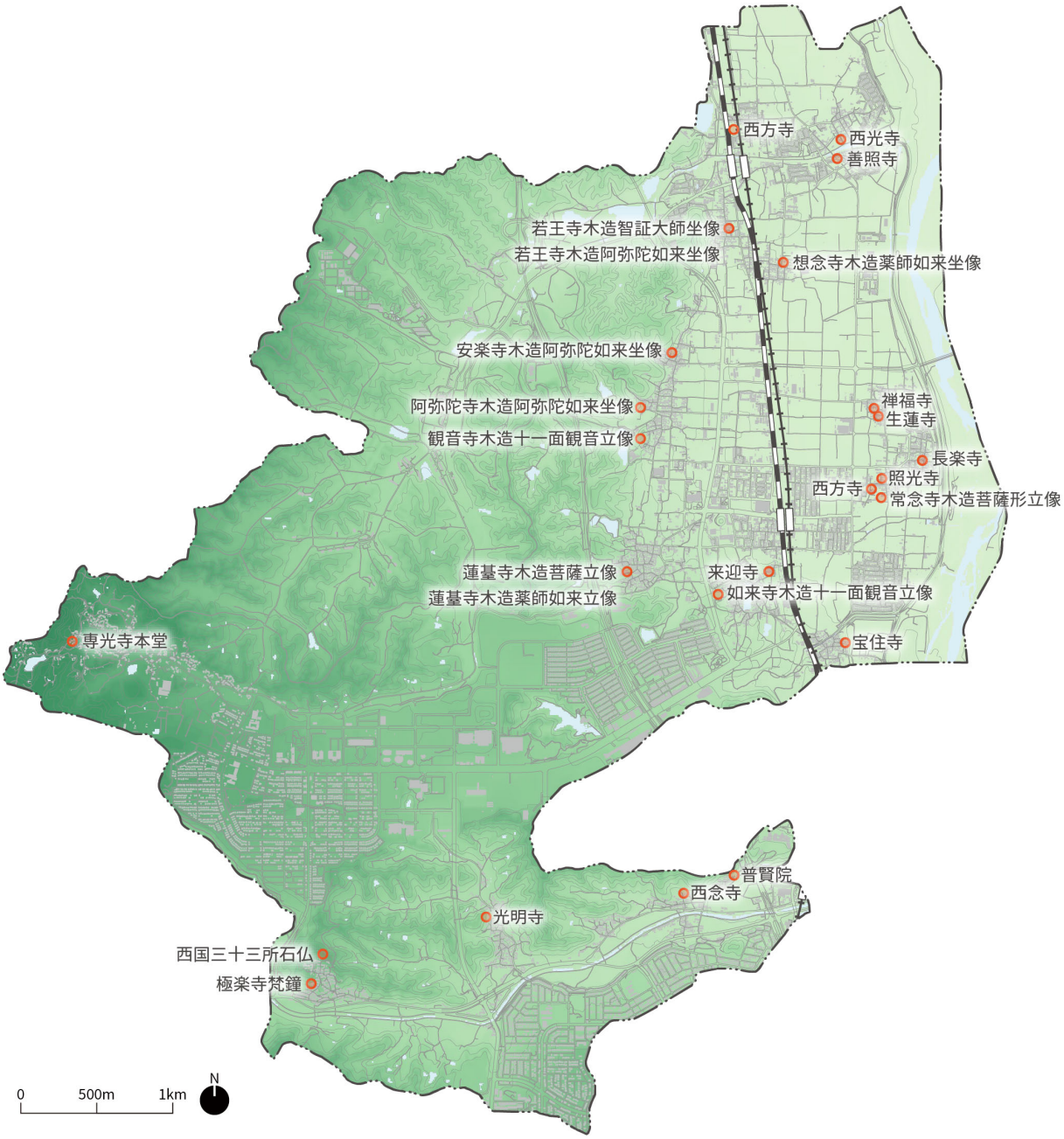


図 3-8　信仰②に関連する主な精華町の宝ものの位置

人①　山城国一揆と中世惣村

京都と奈良の間に位置する精華町域では、中世、激しい戦乱が繰り広げられました。戦乱の世の中で、人びとは結束し、現在につながる自治組織を形成していきます。

■中世の戦乱と山城国一揆

室町時代、応仁・文明の乱後も南山城では畠山政長（東軍）と義就（西軍）の両軍による戦乱が続いていましたが、地域の国人衆（武士）は団結して両軍を撤退させ、山城国一揆を結成し、綴喜・久世・相楽３郡を自ら治めました。数年後、国一揆は守護の支配を受け入れて解体しましたが、一部の国人はこれに反対して稲屋妻城に立てこもり最後の合戦が行われました。精華町内では、国一揆に関する直接的な資料・遺構は発見されていませんが、興福寺の「大乗院寺社雑事記」等には稲屋妻をはじめ町域の地名が多数登場します。

稲屋妻城

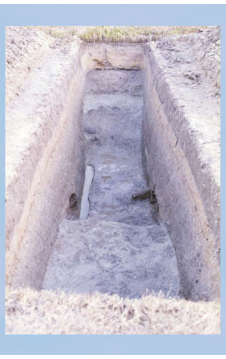
中世の文献に登場する「稲屋妻城」の跡地は未確定ですが、北稲八間の城山あるいは南稲八妻に所在したとする説があります。

中世城館に関連する小字地名

堀殿城（祝園）、南城別当（東畑）のように、町内には中世城館との関係が想定される小字地名がいくつも残されています。近世の村絵図や明治の地籍図には、現在は消滅した関連地名が記されており、貴重な手がかりとなります。

下狛廃寺（下狛）

下狛廃寺の発掘調査で検出された中世の大溝を、南山城における西軍の拠点となった大北城の堀とみなす見解があります。



■惣村の成立

山城国一揆が成立した中世後期は、農民が経済的成長を遂げ、惣村という自治組織に結集した時代でした。北稲八間の武内神社本殿に残る棟札からは、中世の自治組織の変遷を知ることができます。

武内神社本殿棟札 府登録 **（北稲八間）**

鎌倉時代から江戸時代の棟札が連続的に残されていて、地区の自治組織の移り変わりが分かります。文明４年（1472 年）の棟札には、惣村自治を主導した人びとを指す「老名（おとな）」の文言がみられます。

新殿神社　二の会・松の戸（山田）

正月と秋に行われる新殿神社の神事です。山田・乾谷の宮座の人びとが神前に神饌を献じたり、座衆に給仕したりする所作や様式には、中世惣村の面影が感じられます。

■中世の祈りと石造物

山城国一揆やその前後の時代に建立された仏教石造物も残されており、戦乱が繰り広げられた時代に地域の人びとが捧げた厚い祈りを今に伝えています。

新殿神社十三重塔（山田）　国重文

山城国一揆の成立期間中である延徳３年（1491 年）に建立された石造の十三重塔です。基礎には、「百万遍念仏」・「三界万霊」の文言とともに 24 名の名前が刻まれています。

光明寺名号板碑（乾谷）

延徳３年（1491 年）に「念仏一結衆十七人」によって建立された石碑で、「南無阿弥陀仏」と刻まれています。

地蔵石仏・五輪塔（北稲八間）

北稲八間の共同墓地には、国一揆解体から 44 年を経た天文６年（1537 年）の造立で「逆修人数十四人」の銘が刻まれた地蔵石仏１基および五輪塔 14 基がまつられています。

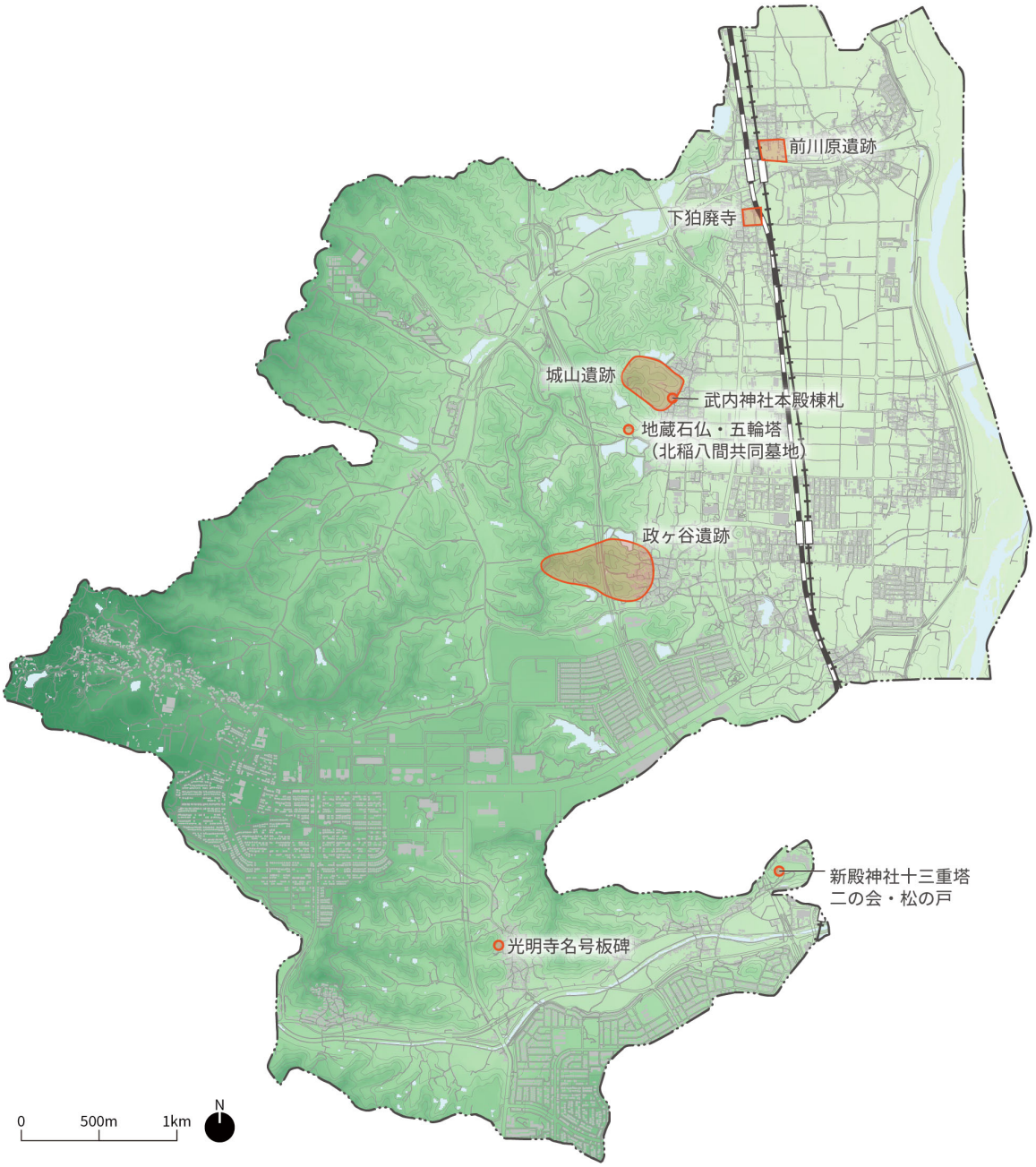


図 3-9　人①に関連する主な精華町の宝ものの位置

人② 村の歩みを伝える古文書

近世から近代にかけて、町域の統治や自治の様子を伝える様々な資料が作成され、保存されてきました。

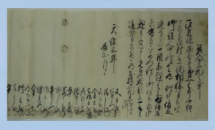
■近世の統治を伝える文書

近世の精華町域では、複数領主が入組支配する村が大半でした。特に、旗本領の割合が高く、旗本領では地元の有力者らが在地代官に取り立てられ、江戸に居住する領主（旗本）に代わって所領支配の実務を担いました。旗本天野（あまの）領の森島氏（祝園村）や旗本大岡（おおおか）領の福井（ふくい）氏（山田村）が代表的な在地代官です。また、庄屋（しょうや）は領主支配の末端を担うとともに村落自治の代表者でした。庄屋や在地代官は、村の自治、領主支配の実務の遂行等の経験を通して鍛えられ、地域運営の能力を向上させていき、近代になると「名望家」として地方自治や鉄道誘致を主導する人物も現れました。

村を治めた領主に関する資料

江戸時代の村と領主のつながりを現代に伝えるものとして、旗本朝倉氏の墓所（北稲八間）、旗本大岡氏の墓所（山田）、観音寺（北稲八間）に安置された瑞龍院日秀（豊臣秀次の母）の位牌、公家石井家の会符（菅井）が挙げられます。

庄屋の古文書



庄屋の職務に基づく古文書として、年貢割付状・皆済目録、宗門人別改帳（戸籍簿）、検地帳（土地台帳）、村掟などが、庄屋の子孫宅に保管されてきました。

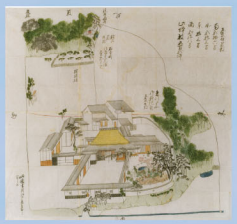
森島清右衛門功績碑

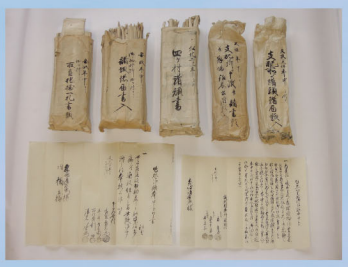
旧祝園村役場跡（中区集会所）には、明治～大正時代に祝園村長として治水・耕地整理・鉄道誘致に貢献した森島清右衛門の功績碑が建てられています。

在地代官の古文書・資料

旗本領の割合が高かった近世の精華町域を特徴づける文書群で、旗本の家臣と取り交わした書状、領地の村々から提出された願書・届書がみられます。旗本大岡領の代官を務めた福井家には、近年まで代官屋敷と長屋門が残されていました。そのたたずまいを伝える住宅図や瓦が保管されています。

なお、江戸時代に庄屋や在地代官を務めた家から、明治・大正時代に戸長・村長が出ることも多く、近代の関連文書も残されています。





■人びとの暮らしや自治を伝える文書

様々な領主が町域に存在した近世ですが、村民の日常生活や農業生産は領主別に分割されることなく、中世惣村の基盤を受け継ぎながら村としての一体性が保たれていました。その影響は近代の村や自治会にも及びました。町内に残された古文書や歴史資料には、地域の様々な立場の人びとの活動や関わりが記されており、これらが折り重なって展開した地域の歴史を今に伝えています。

寺社の古文書

由緒を記した縁起、年中行事の記録、過去帳等が伝わります。

文化に関する資料

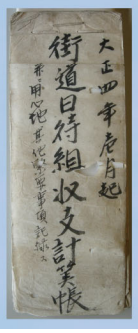
俳諧の一種である冠句の入選句を集めた点帖、多彩な文芸や教養の典籍、草相撲の力士・頭取を祀る墓等、近世から近代にかけて地域で花開いた庶民文化の資料が残ります。

自治会の古文書

近世以来の古文書（区有文書）を保管してきた地区があります。重要な証文や村絵図などが含まれています。

日待の古文書

村のなかは、カイトなどと呼ばれた組に分かれていました。カイトでは日待という寄合を開き、神仏の掛軸を祀った当家で飲食を共にし、地域の運営を協議したり、親睦を深めたりしました。日待の記録や道具類は帳箱に入れて輪番で保管しました。



精華町役場行政文書

明治時代から昭和 30 年（1955 年）の町制施行までの旧村時代の行政文書には、会議録・統計資料等が含まれ、近代地方自治の基本史料です。

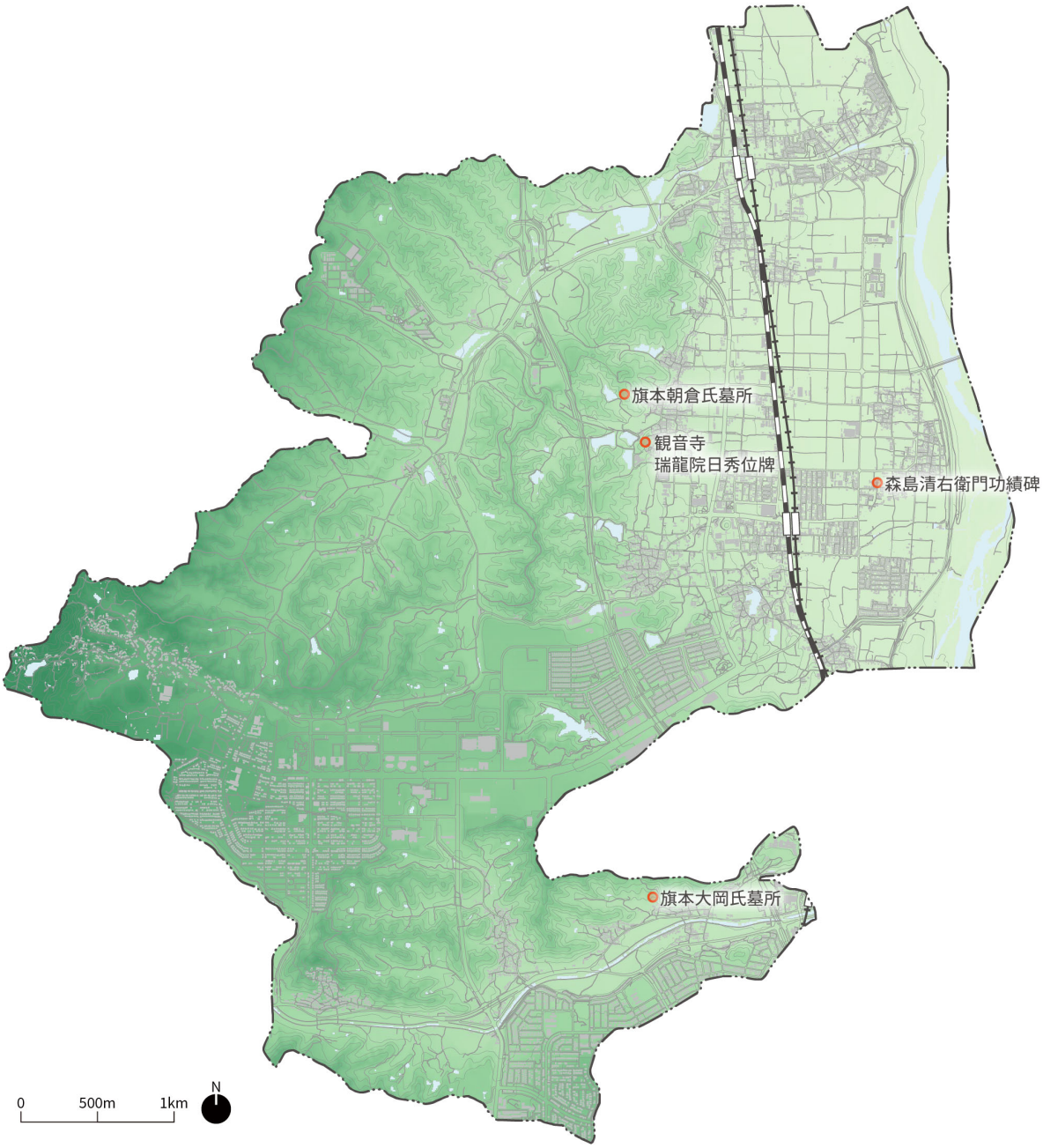


図 3-10　人②に関連する主な精華町の宝ものの位置

人③　町名の由来と学校

精華町という町の名前は、明治 25 年（1892 年）から大正９年（1920 年）まで存在した精華高等小学校、及び昭和 22 年（1947 年）に創立した精華中学校の校名に由来します。

■精華高等小学校の設立

明治 22 年（1889 年）に町村制が施行されると、精華町域では江戸時代以来の村々が合併し、狛田・稲田・祝園・山田荘の４か村が誕生しました。明治 25 年（1892 年）に相楽（さがなか）村（木津川市）を加えた５か村の組合で精華高等小学校が設立しました。高等小学校を尋常小学校に併設する町村も多いなか、５か村は菅井に単独の校舎を建設して共同運営を行いました。

大正９年（1920 年）、校舎費用の問題から精華高等小学校は分離解散（各尋常小学校に高等科を併置）しましたが、30 年間に 1800 余人の卒業生を送り出し、地域を担う人材が輩出しました。

北稲八間小学校跡

明治５年（1872 年）８月、精華町域で初めて開設された小学校の跡地。現在の北稲八間集会所の一画にあたります。当時は観音寺の旧本堂を校舎としました。

松田家文書及び写真資料

精華高等小学校の学校運営に尽力した松田弥三郎が、学校の創立から解散に至る経緯を挿絵を交え詳細な記録にまとめました。

精華高等小学校校舎上棟式幣帛（へいはく）

明治 29 年（1896 年）、菅井に精華高等小学校の新校舎が建設されました。上棟式に用いた幣帛が残されています。

■精華中学校の創立と精華町の誕生

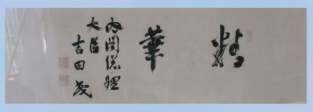
第二次世界大戦後の教育改革を受けて、昭和 22 年（1947 年）に川西・山田荘・相楽３か村は中学校組合を設置し、精華中学校を創立しました。かつて存在した精華高等小学校と同じ範囲の村々（川西村は昭和６年（1931 年）に狛田・稲田・祝園３か村が合併した村）で新制中学校が新設され、校名も受け継がれたのです。開校後、中学校の校区をもとにして町村合併の協議が進められましたが、最終的に川西・山田荘の２か村による合併が決定し、昭和 26 年（1951 年）に精華村が誕生し、昭和 30 年（1955 年）に町制を施行しました。

このように、精華町という自治体は、学校を共同で運営してきた村々が集まって誕生した町であり、時代に応じた「自治」と「教育」を大切にする伝統を受け継いでいます。

精華中学校（南稲八妻）

精華町の町名の由来となった中学校です。写真は初代の木造校舎で、現在の校舎は平成 27 年（2015 年）に竣工した３代目の建物です。

扁額「精華」



内閣総理大臣を務めた吉田茂が「精華」と揮毫した書で、町長室に掲げられています。

山田荘小学校東畑分校跡

平成５年（1993 年）３月まで山田荘小学校の分校が、現在の東畑集会所の地にありました。東畑分校の廃校に伴い、同年４月、東光小学校が光台七丁目に新たに開校しました。

学校写真・卒業アルバム

山田荘小学校には、たくさんの昔の写真が残っていました。各校の卒業アルバムに収められた写真は、学校の歴史や児童・生徒の思い出を伝えています。

川西小学校（北稲八間）

昭和６年（1931 年）に狛田・稲田・祝園の３か村が合併し、川西村が誕生しました。３村合併の直接的なきっかけは小学校校舎増改築の必要性でした。翌７年に川西尋常高等小学校の新校舎が落成しました。同校の校章は、３村が鼎立する姿を表しています。

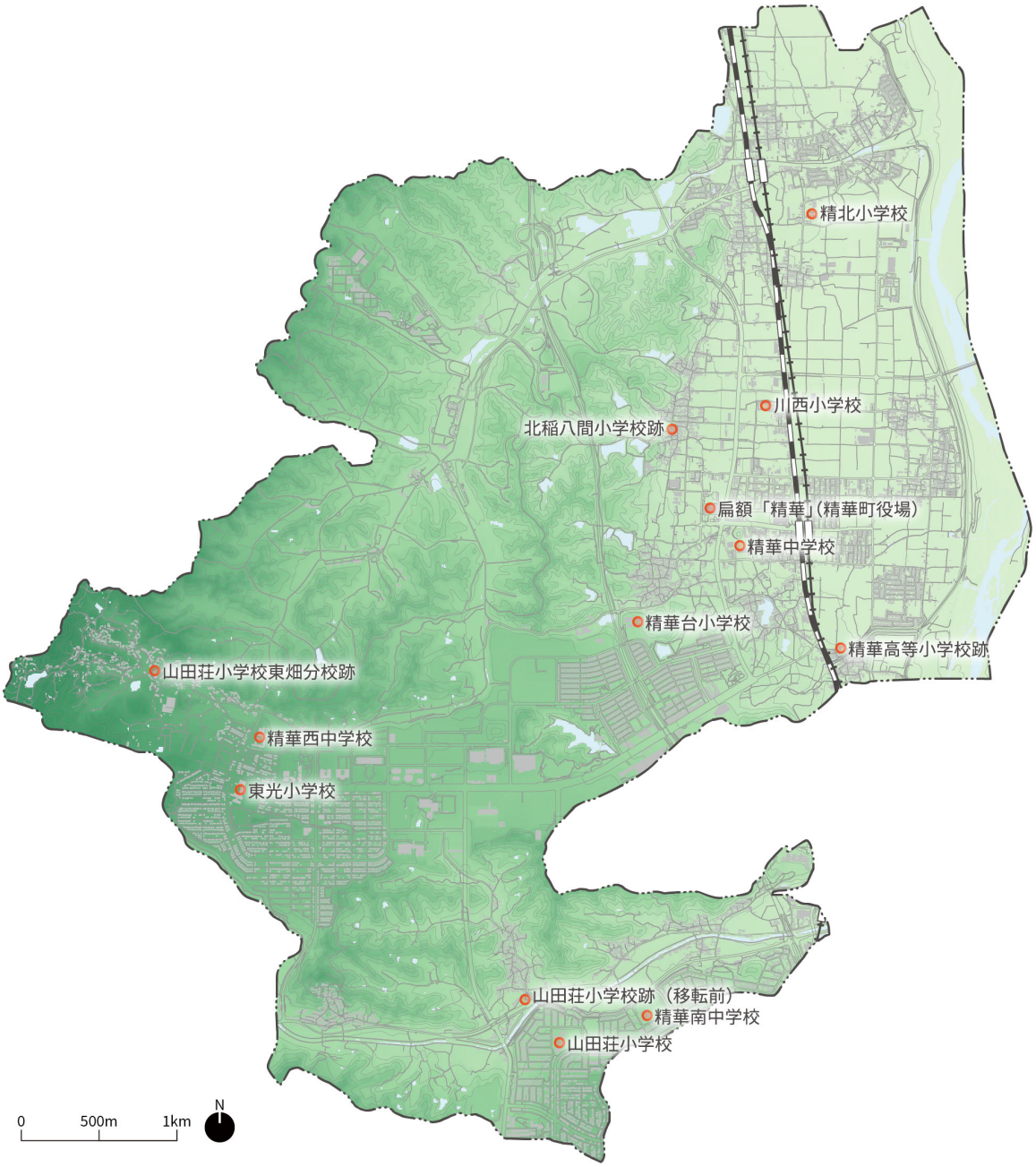


図 3-11　人③に関連する主な精華町の宝ものの位置

景観　学研都市と田園の景観

高度経済成長期以降、周囲の自然や環境との調和を目指しながら新しいまちを建設し発展してきました。ニュータウンの開設から年月を経て、このまちをふるさととする子どもたちも増え、まちの歴史も蓄積されてきました。都市開発の一方で、伝統的な田園風景も維持されてきました。こうした景観は歴史的な変化を織り交ぜ培われた生きた景観だといえます。伝統的な農村の田園風景と、新しい都市のまちなみという２つの景観が共存する点に、精華町の特色と課題も併存しています。

■江戸時代の趣を残す農村の風景

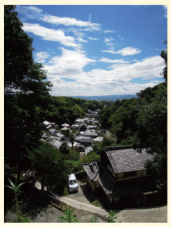
民藝（みんげい）運動の陶芸家として知られる河井寛次郎（かわいかんじろう）は、植田の集落の景観をこよなく愛し、この地を幾度も訪れています。河井が植田を訪れたのは昭和前半期のことですが、現在でも精華町内には伝統的な農村のたたずまいが各所でみられます。こうした風景は、江戸時代の村の景観を基礎としており、当時の村絵図に描かれた村の姿を今もとどめています。農村集落は、平野部の田園地帯のなかに、あるいは里山の裾野にあり、人と緑が隣り合う環境のなかに溶け込んできました。

近世の村絵図

村絵図を見ると、近世の道路や川筋がほぼそのまま現在に踏襲されている地域も少なくありません。

昔からの農村集落のまちなみ

北稲八間・南稲八妻（平地の集落）や、柘榴・東畑（坂の多い集落）が挙げられます。



釈迦（しゃか）の池

植田の集落は釈迦の池を取り囲むように形成されています。河井寛次郎は「長い年月自分は村を見て歩いたが、今日此の処に見た村の様に自分を有頂天にした村はさう沢山にはない」（『民藝』昭和 19 年 7 月号）と、釈迦の池を隔てて見た植田の集落の美しさを讃えました。

木津川堤防からの眺望

一面に広がる水田の風景。田園地帯のなかに古くからの農村集落と戦後に形成された住宅地が点在しています。

■学研都市の建設

昭和 50 年代後半以降、京阪奈丘陵に学研都市の建設が開始されると、精華町内に最新技術を扱う産官学のさまざまな研究・文化施設が設立されました。平成 12 年（2000 年）、学研都市の精華・西木津地区が「都市景観 100 選」に選定されました。メインストリートである精華大通り（生駒精華線）は、沿道の近代的な建造物と街路樹が調和した独特の景観で人びとから親しまれています。一方で、開発前の自然環境や歴史遺産を活かして整備された公園等の公共空間もあります。

精華大通りとメタセコイア並木（精華台・光台）

秋に一斉に黄色く色づいたメタセコイアが並び立つ姿は壮観です。

けいはんなプラザの日時計（光台）

世界一の文字盤面積を有する日時計は、学研都市の象徴的なモニュメントです。「京都府景観資産」に登録されています。

鳥谷公園・こずえあかりの道（光台）

開発前の尾根を活かして整備された公園と遊歩道には緑が多く、いろいろな野鳥や蝶が見られます。

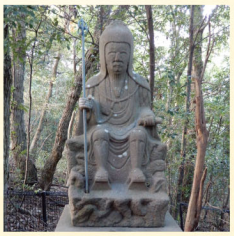
けいはんな記念公園（精華台）

平安建都 1200 年を記念し、「自然との調和と共生」をテーマとして開発以前の里山や永谷池を活かして創られました。園内の水景園にはかつて用水確保に苦心した地元の歴史を物語る永谷隧道の樋門や通水碑が復元・移設されています。

トキの球・ヒトの球（光台）

光台のまちびらきを記念して作られたモニュメントです。

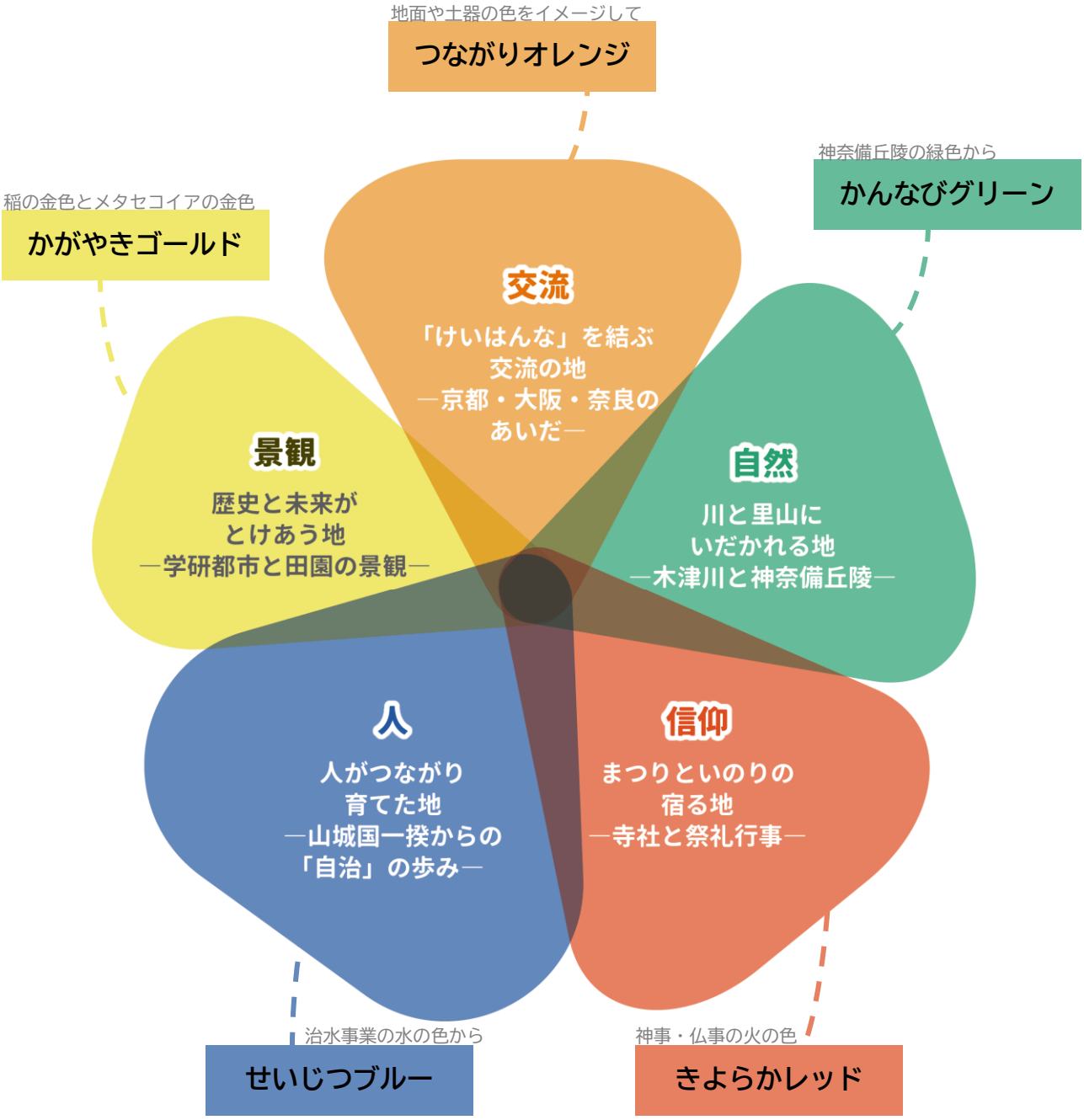
役行者（えんのぎょうじゃ）の石像（山田・桜が丘）



桜が丘地区の造成に伴い、寛政３年（1791 年）に造立された役行者の石像が、地区を見守る小高い丘（山田墓地内）の上に移設されました。

山田川沿いの遊歩道と桜並木

図 3-12　景観に関連する主な精華町の宝ものの位置

Column 育てる・つなぐ・創る　歴史文化の特徴のテーマカラー

歴史文化の特徴で用いたカラーリングは、それぞれの歴史文化の特徴を踏まえ、精華町文化財保存活用地域計画作成協議会で決定したものを使っています。各カラーは、以下のとおりです。